

ぼくの期待

作家 三木卓

今、多少の白内障がある。鼻づまりがひどくて嗅いがかぐ力がおとろえている。かつてアルフレッド・コルトーのタチにこの上ない輝きを感じていた自分は二十代だった。今もいい音だとは思うが、録音が古いな、と感じる。

五月になると満八十才となる。ぼくの五感は八十年間、外界を認識して来た。くわしくは話せないが、心に秘めて残っているさまざまな表情や声は、ぼくの人

生のなかでもっともすごい瞬間のものだった。やがてそれらの記憶を全部持ったまま、自分は世界をかく生きたと思いつながら永遠の暗闇にそっと消えていくことになるだろう。

ぼくは幼いときにポリオをわずらったので、その記憶の全体像は世の普通の人とは多少ずれているかもしれない。しかし、まあそういうことは、どのひとにも在る特殊事情のひとつと考えていいだろう。

ぼくは口で味わい鼻でにおいをかぎ、目でものを見て、手で対象をさわって生きてきた。それは人間の感覚的認識の基礎であり、ぼくは、それを世界すべてを感じる事が出来ることと同義に考えて疑わなかった。今も日常的には疑わないで生きている。

しかし本当はどうなんだろう。この世のすべてを感じる能力をもちろん人は体の構造の限界としてまずそこに横たわっている。

しかし、人間は諸科学の発展において、さまざまな工夫を行って来た。肉体もつ条件を基盤として、その性質を生かし、生の条件を生かし、素朴な意味では知ることの出来ないことを、さまざまな方法をあみ出すことによって、あるいは自然ではまず出せないような状況をつくり出すことによって、不可視のものを可視化することに少しずつ成功して来た。ぼくは擬似科学のトリックにあっさり欺されてしまう程度の人間だから、とても役立つものではないが、人がどこまで認識し得る存在になれるかにはいつも関心を持っている。たとえば、大装置をつかった果てに重力波などというものを早くつかまえて、生き先のみじかいぼくを感心させてほしい。人間よ、前に出よ。

もっていないが、生きるために一応の不便を感じない程度に人は外界を知覚し得る。そのために、電車にぶつかったり、相手のコップにストローをつっこんで飲んだりしないで済んでいる。が、実はそれはごく大ざっぱな問題にすぎない。

モンシロチョウに紫外線が見え、人間にはそれが出来ないなどというのもそういう微妙なズレであるが、その程度のことではなく、人の認識力にもっと決定的な欠陥があるのではないか。

ぼくには知りようない、つまりぼくらの実用脳が必要としないために捨てたような、深い認識の欠陥をもったまま平気で生きている。

あえていえば、ぼくたちの諸科学をはじめとする認識の体系は、その程度の基礎の上のもので、第三者が見たらとても語るに堪えない程度のものであるかもしれない。

みき たく / 1935年生まれ。早稲田大学ロシア文学科卒業。出版社勤務を経て、文筆生活に入る。主な著作に詩集『わがキディ・ランド』他、小説に『鶉』、『野いばらの衣』（講談社文芸文庫）、『裸足と貝殻』（集英社文庫）他、評論に『北原白秋』（筑摩書房）他。